定時刊行

真久樂雙誌

第二號

特54
55

東京圖書館

和書門	小說類	函	別四架	一の二號	四冊

中古美談

○細川兵部太輔藤孝は文武歌道とも世人の知處なり秀吉或時紹巴に向ひ吾發句せん汝脇句せよとて　奥山に紅葉ふみわけなく鹿　とせられしかば紹巴脇　しかとも見へぬ燈火の影　とつけ鹿は鳴虫なれはすと申しなれば秀吉公鹿は聲あくとも吾鳴せんとせば鳴もべしと云れし時幽齋傍らより　武藏野や篠をつかねて降雨に鹿より外鳴虫もあしと　詠る歌のいと云ければ秀吉公大きに悅れけり

○毛利元就は活機の大將なり常は云れしは智万人は勝れて天下の治亂世の盛衰を心に懸る者は世に生れく異の朋友あり一人も有べからず千年の前十年の後に異の朋友は有べきあり是必らず一時は生れあば人を害すか害さるゝかあり此二人和睦して世を治めんは萬代安堵四海太平と稱する世あらんと也酒宴有て機嫌よき折柄柱に傍掛られ空を諳められて何も此の如しと申されし

○立花左近將監宗茂敵を城中へ遣し今日味方討死の中十時傳右衛門と云者あり取分不便に思ひしも名死骸を送り給りしへ迎物具の色を書て言送りしかば頓て返しぬ又城中よりも山田三右衛門が首を返し給へれと望みしかば骨を添て送られける是と大津の死骸返しとて勇士死後の譽れとしたり

○島津修理太夫義久は居間に和漢の圖畫を書せらるゝに皆無道にして國家を亡す人の事跡あり常は語り給ふは能事の五ッは真似易く惡事の一ッは至つて去り難し古の惡き事のみ耳目は觸れ世の中を浮と心得又は能事は自ら出來るものあり御子方へもよく御心を留られ御見覺有べきと仰せられける由文武の名將といはべし

社告　本誌發刊の定日遲引致し升て何共恐入升が以來は定日は聊か無相違出版仕升故此段は詫方々は披露

定價　一冊金五錢○十冊前金四十五錢○二十冊前金八十五錢府外遲送は郵税一冊一錢の割を以て申受は且郵便局無之地は一冊は付一錢宛の增税を受は事

明治十五年五月二十九日出版御届　毎月三回出版

編輯出版人　東京府平民　清水市次郎

芝愛宕下町四丁目三番地　探古舍

大賣捌　元大坂町十一番地　法木德兵衛

死を以て諫め奉つらば万が一ッも用ひの事も有べしと心を定め一紙の諫書は數條の利害を演述し息男監物は遺言して死後信長卿へ呈せしめ軍學陣法六韜三畧の奥旨とも悉々く監物は傳へ終は腹搔切て死たりける監物は涙あがら彼諫書を持參して信長卿は捧げ泣々事の次第を言上すれば信長大きは驚き其遺書を開き見て感と發して悲み歎きさしも才智賢知中務も我本心を知らずして諫死を遂さるこそ返す〳〵も殘念あれ我新に父を失ひ今戰國の中に跨り尋常にては國と保つ事能はずさる故に傍若無人の行狀を成して隣國の强敵を物の數とせざるは我深き計策あり往來の僧を捕へ我異風を破等は為めし金錢を與へ去しめさるは信長こそ活氣の若者尋常の將にわらずと諸國へ風聽させん爲あり或は我を狂ありと思ひ伺ひ來る者あらば微塵は成して勇を示し終には天下に縱横せん我本心を知らざりけるこそ悲けれと諫書を面に押當てさめ〳〵と泣給へは監物は低頭平身君は若年はさしはとと雖ども天性自然の英才はして斯る計策有名將とも知らず誹謗がましき諫言返す〳〵も恐れあり父政秀も草葉の陰はて浮心体を承まは何程か嬉しく思ひ侍るべしとて信長卿諸共に紅涙數刻は及びけり信長重て仰せけるは汝今初めて我本心を知ると雖ども堅く他は語るべからず我久しく此行ひをはすべき所存にも非ざれば頓て行狀を改め堅固に國政を執行ふべし然る時は中務が諫死はより信長が正路に歸せしと云へは中務が忠死空しからじと有難き君命は監物とかうの言葉もなく只涙はぞ呉けるが信長卿の智仁凡慮の及ぶべき所はあらずと密は喜てひよ〳〵忠志を屬みけり

○織田信長齋藤道三と正法寺は會す

天文十八年春二月備後守信秀未だ存生の事はありしが濃州の國主齋藤山城入道々三が女を以て信長が室とす然るに其翌三月信秀卒去はりて子息信長家督相續せると雖ども其行跡正しからず頗る狂人は似たりとて舅道三信長は對

面し其器量をためし柔弱の將ありせバ聟ゐ成して益あけれバ襲て尾州を切取べしと使者を以て信長を招き濃州富田の正法寺ゐおひて謁見せしむべきよし申送り諸事の應對萬事の行粧古風を守り信長に美濃の正しき國風を知らしめんと其用意まち〳〵也去程ゐ織田方より家老林土佐守柴田勝家等信長濃州ゐ趣き給いんと其恐れあるさゐあらず事によせて辭退有べしと諫めけれども信長曾て用ひ給いず同五月廿六日正法寺へころ趣き給ふ既に富田の庄の町口ゐ至り給ふゐ其行列出立の異やう成るよ美濃の人民肝を潰し天晴勇々敷觀物哉と袖をつらね膝をせとへて見物す此よし道三人道へ達しけるバ信長ゐがゐる出立よて來りけんと近習少々召つゐ民家の内より窺ひ見るに信長卿の行列こそ目覺けれ鉄砲三百挺左右に列し次よ三間柄の朱鎗三百筋是も同左右よ備へ其次よ歩行の者百余人悉く赤き裝束を着し馬前を守護す信長卿の出立よい朱を以て染ゐせし瓜の大紋の帷子よ虎の皮の半袴を着け襷斗付の大刀脇差と藤縄を以て巻せ緋の織を打て腕ぬきを付々衣帽子と着せず萌黄の平打ゐて髪を巻立腰の廻りにい火打袋馬手指鞭單ゐどの物を多く結び付栗毛ゐる荒駒よ白淡くませて上下の同勢一千餘人次第を守つて打せける道三を始め近習の人々興をさまし扨珍らしき出立かゐと思いずどつと笑ひけるゑ信長屹と見咎め我姿を見んとならバ我前へ出て見るべし無禮い寛し遣すゐりと大音に呼いりて打過るを道三聞て大ひに驚きあいて忙めき忍バて先へ歸りけり扨も信長い正法寺に至り休息の間ゐ入りて卒ゐ裝束を改めかちんの素袍烏帽子を着し威儀堂々と座ゐ着給へバ齋藤が臣下い言ゐ及バず織田の近習用人迄恐れて平伏したりゝる入道々三頓て其席よ立出て互ゐ慇懃叮嚀を演深く因を結びけるが信長道三が面を屢々打守り前に町口にて障子の隙間より我を伺ひ笑ひ戯れし曲者に能も似給ひける者かなと呟やき給ひけれバ道三心中に大よ恐れかゝる眼力有大將いかでか人の下位に立んや我子孫も終ゐい信長の門前に馬を繋ぐべしと歎息せらゐゝるが齋藤一家信長の爲に亡びぬるこそ道三が先見明のゐりと謂つべし偖も山海の珍味饗膳美善を盡し其日の宴會終りけれバ互よ暇を告て信長頓て退出ゐる道三入道も半途まで送り參らせけるが途中の行列已前のごとく花美ーきゐ齋藤家の行裝い兼て古風を守り目立ざるを專一とせし事ゐれは何とゐく威と奪いれみすぼらしくころ見へよけり去バ美濃一國の軍民等信長い活達の勇將かゐと密よ感じ思ひけり

○信長奇謀堀田春日の兩士を斬る

信長道三が女を娶り因を結ぶといへども終ゐい美濃國を斬取べき所存有けるが信長一計を生じ毎夜道三が女濃姫が熟睡を伺ひ密かよ起て外ゐ出曉きに至て歸る事一月余り濃姫是を怪みて君忍びて心を通いし給ふ者あらバ露ーて召せ給へ妾聊かも妬む心侍らず何ぞ身を窶して深く包ませ給ふぞやと恨み顔なりけれバ信長いかでらさる事の

齋藤道三老臣堀田春日を殺す

侍らん我一ッの秘計ありて人ゐ語るべき事にあらねバ疑いるゝも理りとて又前の如する事一月計り濃姫いよ〳〵心を苦しめ是程ゐまで心置れ參らせんとい兼てい思ひ知ざりける女心の愚さよハ志ざしの厚からん方をバ是に居させ給へかし妾い何地にも出ていゐばやと涙を流しかてちけれバ信長詮方なき躰よもてゐし汝が父道三入道我とい久しき仇ゐり一旦和睦ゐしてハ身をむかへ參らせぬれ共是我本心ゐあらず今美濃の家老堀田道空春日丹後の兩人密に我と心を合せ道三を殺害し夜子丑の刻限ゐ火を揭て相圖とすべしと固く約束しゐりしが此五十余日が間毎夜星を戴き霜を蹈で是を望めども未火の相圖之ゐきい今ゐ其便りを得ざる者ゐるべし今宵にも相圖の火を揚ると等しく軍兵を卒し濃州へ亂れ入り齋藤一家を討亡すべし穴賢口より出し給ふゐと物語是より濃姫ゐ守護の兵士を付置道三方の文通などを禁じけれバ濃姫い信長の物語を實ありと思ひ日夜心を苦めゐるゐ彼守兵信長の内意を受て態と怠りがちゐ或い眠り又い席を立て外ゐ出ゐんど甚だ緩弛なりけれバ濃姫こま〳〵と文ゐ委細を認め父の許へ告々れバ道三大ひゐ驚き怒り終に堀田春日の兩人を斬罪す是信長が寸謀ゐり斯る智謀の大將ゐれバ藤吉郎志ざしを織田ゐ傾け折を見合せ居たりける

○藤吉郎信長卿に見參す

永祿元年九月朔日織田上総介信長卿小牧山ゐ狩し給ふ藤吉郎折よしと青き木綿の陣羽織を着一兩刀を帶び御狩場ゐ推參し大將の見參に入べしと申けれバ織田家の功臣柴田權六郎勝家怒て曰我君ゐ直訴せんとい推參ゐり察する所敵國の間者成るべし搦め捕て拷問せよと士卒に下知して取卷たり藤吉少しも恐れず某曾て左樣成る怪しき者ゐ非ずたとへ敵國の間者たりとも小兵の某只一人大勢出合からめ給ふゐ及バず敵の間者と見定め給いゝ夫ゐ付て中ゐ行ふ謀も有べし思慮ゐき一言笑ふゐ絶たりといふ信長遠に此由を聞給ひ藤吉を近く召れ其來由を尋給ふに藤吉謹んで申けゐい君今日のハ狩ゐ數多の鹿猿を得給へども天下國家の爲にい益ゐし我一人を得給ふときい忽ち天下を平定し四民万歳を謳ふべし此事を申さんため推參ゐたしゐなりと申けれバ信長卿希有の事ゐ思召し問ふて宣ふい汝武道ゐゐゐて何事をゐ心得たるや此時藤吉聲を勵まし某上い天文を悟り下い地理に通じ其中ゐゐいて悉く知らずといふ事ゐく辨へずといふ事ゐし實ゐ亂世の孔明治世の周公召抱て其能を試み給へといふ信長卿感ろき給ひ先手下と成して其實否を正さんと足輕頭藤井又右衛門を召て藤吉を預々給ひ頓て本城へ歸り給ふ此藤井又右衛門といふい元い尾州津島の町人なりしが家富榮へ代々織田家の用金を調達し時の用ひ重かりしが應仁の亂れより盜賊去さりゐ徘徊し金銀を貯へ市中の住居成りがさく清須の城中に居を移し信長卿の時ゐ至つて足輕頭を仰付られ堅固ゐ勤役したりゝる又右衛門女を以て藤吉ゐ嫁せしむる事い後の身を見て去るべし

○藤吉郎信長卿ゐ仕ふ

其夜藤井又右衛門い信長卿の仰を承まはり藤吉郎を近く招き其生國性名并びゐハ前ゐて申上たりし天文地理兵學の事を尋るゐ藤吉郎答へて申けるい某が父い中村彌助昌吉と申て先君備後守殿に仕へ足輕と勤め戰場ゐて膝口を射られ仕へを止めて當國中村ゐ住し百性と成る某則ち彌助昌吉が悴中村藤吉郎と申者ゐて侍ふ勿論先に申たる天文地理ゐんど申事曾て以て一向存不申只當家ゐ奉公仕つり度望みにゐへども不肖の某一愚ゐて召抱へも有まじくと口ゐ任せて僞りを申てゐへバこそハ目に止り貴殿の御尋にも預り拙者が本望何事か是に去うんや仰ぎ希くい御吹擧を以て中間奉公ゐくも仕つり忠勤を盡し奉つり度よし打歎きて願ひけれバ藤井も案ゐ相違して此旨言上に及けれバ信長大ゐ笑いせ給ひ不敵のふるまひ言語道斷おかしき奴ゐり汝か組下とゐし中間ゐ召抱へよと直ゐハ馬飼ゐ仰せ付られ小猿〳〵と召れける

○藤吉郎小牧山に樹木を算ふ

偖も藤吉郎は御馬飼となり晝夜馬草飼料の手配油斷なく其暇よりは一向手を以て馬の總身を撫ければ暫くの間に其毛色美くしく輝くなぞ信長卿の眼目にとまり草履取を仰付らるるに寒氣の時節には草履と己が懐中に入て温め萬思し召よ叶ひなる信長卿はいまだ壯年にまし〳〵殊更强氣の大將なれば嚴冬極暑と雖ども更に厭ひ給はず毎朝卯の刻より馬を責給ひけるがある朝雪最ふ降積て寒氣至つて烈しきよ常よりも早く起給ひ玄關に人影も稀なれば誰かあると召るけるに藤吉郎にて侍らふと答ふ信長藤吉に問ふて宣まふ如何ゐしてか汝の外ゐ人はなきぞ藤吉郎誰んでさん候らふ今朝は例日より君のおん出半時計り早く侍らふ程ゐ未だ一人も參らずはと申す信長また問て汝一人何として早く參りたるや藤吉答へて下郎事今朝のみにあらず毎朝衆人よりは一時づゝ早く參りは出立を相待はと申す爲よりて信長卿藤吉が勤勞衆に超たるを感じ終に重く用ひたまふ程に遂に臺所奉行の役に撰み出さを諸事の費を省き樣々の工夫を以て臺所の物入少なきやうに取極りれば始て三十貫の扶持を下し賜はりける又ある時小牧山御狩の時山中の樹木を數へさせ給ひるに多くの木あれば混雜して算へがたく人々甚はだ困りるを藤吉郎工夫を以て細き繩を三尺計りゐ切て木の根よ結り付け惣繩數何程と定めおき殘りし繩を算へみれば一本も相違なくいと易く數へ終る是又藤吉郎が時ゐ取ての才智ありと人々感じけるとぞ

○藤吉郎藤井又右衛門が女を娶る

狐陰は則ち生せず獨陽は則ち長せず故に天地の配は陰陽を以てし男は女を以て室とし女は男と以て家とす故に人生の偶は夫婦を以てす陰陽和して後雨澤降り夫婦和して後家道あれり信長卿の足輕慰藤井又右衛門一女あり名を八重と呼り元より家富榮へける中に出生せし女あれば萬の業よ拙からず加之あらす容貌艶美紅粉の色を借ずして

自然の國色此鄉中に唱へ高し爰に信長卿の小性頭に前田犬千代といへる若者あり此八重を戀慕し媒人を以て又右衛門よ女を乞ふ又右衛門大きゐ悦び先像じめ約諾をなし女八重よ此事を語るいゝ〻思ひけん此女犬千代よ嫁ん事を嫌ひ父の鹿忽ゐ約せし事を恨む爰におひて又右衛門中村藤吉郎を招き此次第と物語り犬千代ゐ斷りを告て婚姻異變の儀を計へしひ藤吉令承して犬千代が許よ至り對面して種々すかし說ども元來犬千代强勇の壯士あれば曾て以て承引せず婚姻異變の趣意を聞て其後よ返答すべしといふ藤吉郎計策を撰へ僞りて云又右衛門女八重某と兼て夫婦の契約あり父又右衛門此事と知らず貴殿ゐ婚姻を許しぬれども迚も此事成就すまじ足下俠氣を以て某しが罪を免し此婚姻異變あ〜給へゝ大悅少からずといふ犬千代甚だ驚きけるが是は藤吉郎が頓計よて彼女よ外に約せし男ゐるべし如何よぞや藤吉ごとき猿面冠者に斯まで深く馴合べきと察しければ態と面を和らげ某曾て足下にかゝ

る契約ある事を去らず不愍よも申出し多罪のがるゝ方てもなし今より我婚姻ハ相止め足下の妹妃と成りて必ず此事成就あらしむべしといふ藤吉犬千代が心根を去りぬれば甚だ迷惑一種々に理れ共犬千代まず〳〵意地強く信長卿へ申上事既ふ決定す藤吉則ち大ひに困りぜひなく又右衛門夫婦ふ此事を告ぐ又右衛門も詮方なく女八重に此事を語れば此女藤吉が醜面をきらいず悦んで是を諾す又右衛門夫婦大に悦び又藤吉郎を招きて此由を物語る藤吉郎いよ〳〵難澁し此一件我一時の計策よりかくあらんとハ思ひも寄ずいかふもーて事を延し重て計儀あるべしといへど又右衛門さらに承引せず事既よ爰よ至るりいおんとも成しがたし且娘足下ふ嫁せん事を希ふ殊更君の仁聞よ達しぬればいづれ異變成がたしとて終ふ吉日を撰み則ハち犬千代を媒妁として八重と藤吉を夫婦とす犬千代ひそかに兩人が容躰を伺ふふさらふ隔つるけしきもなく八重が藤吉を敬まふ事臣の君ふ仕ふるごとし理りあるかあ

藤吉天下掌握の時北の政所と稱し後よ高臺院と号したくまつるハ此ほ方の事ありけり

○藤吉郎普請惣行

或時信長卿の居城清須の城の塀百間計崩かけるを修理せんとて鳴海の城主山淵左馬助が子九郎治郎を作事奉行ふ仰せ付られ晝夜を分たず修復せし究給へども日を重ねて成就せず既よ二十余日に及びされば藤吉郎大にわせり今戰國の中よ挾まつて壘を高くし塹を深くとべき秋なるにかく等閑に數日を過すハ危き事ふあらずや近國の强敵卒かふ襲ひ來らば何に寄て防ぎ戰ハんや思ハざるの甚だしきありとつぶやきなるを信長卿聞しめされいかゝや小猿汝數日を費さず去て城塀石垣修理すべきはかりごとありやと仰げれば藤吉詭んで申なるハ某此普請の奉行とあらば三日の間ふ城塀石垣全たく成就あらしむべし畢竟奉行を始めとし職人共怠たりがちに心を用ひざるにより綻の破損ふ數日を費す事無益の至りにハと申上る信長卿兼

を屹と見て心得たりとハふ儘ふ立たる太刀を取り傍なる障子と一間蹈破り六間の客殿へ跳出天井ふ太力を打付しと拂切ふぞ切たりける時綱ハ態と敵を廣庭へ帶出し透間も有ば生捕んと志て打拂つてハ退き打流してハ飛退人交もせず戰ふて後を屹と見たれば後陣の大勢二千餘騎二の闕より込入て同音よ時を作る土岐十郎久しく戰つてハ中々生捕れんとや思ひけん本の寢所へ走り歸つて腹十文字に掻切て北枕にぞ臥たりける中の間よ寢たりける若黨どもゝ思ひ〳〵ふ討死し遁るゝ者一人も無りけり首を取て鋒ふ貫き山本九郎ハ是より六波羅へ馳參る多治見が宿所へハ小串三郎左衛門範行を先として三千餘騎よて推寄たり多治見ハ終夜の酒ふ飲醉て前後も知らず臥たりけるが時の聲よ驚ひて是ハ何事ぞと周章騷く傍よ臥したる遊君物馴たる女なりければ枕ある鎧取て打若せ上帶强く縮させて猶寢入たる者共をぞ起しける小笠原孫六傾城に驚かされて太刀計を取て中門ふ走出で目を磨々四方を屹と見れば車の輪の旗一流築地の上より見へたり孫六内へ入て六波羅より打手の向てハへ此間の仁謀叛早顯れたりと覺へハ早面々太刀の目貫の堪えん程ハ切合て腹を切れと呼つて腹卷取て肩よ投懸二十四差たる胡籙と繁藤の弓とを提さげて門の上ある櫓へ走上り中差取て打番ひ狹間の板を八文字よ排てあらことゞ〳〵しの大勢や我等が手柄の程こそ顯れたれ抑も討手の大將ハ誰と申す人の向ハれてハやらん近付て箭一ッ請てゆ覽へへといふ儘ふ十二束三伏忘るゝ計り引絞りて切て放つ眞前ふ進んだる狩野下野前司が若黨よ衣摺助房が胄の眞向鉢付の板まで矢先白く射通して馬より倒に射落す是を始めとして鎧の袖草摺胄の鉢とも言ず指詰て思ふ樣に射けるふ面ふ立たる兵二十四人矢の下ふ射て落す今一筋胡籙ふ殘たる矢を拔て胡籙をば櫓の下へガラリと投落し此矢一をハ冥途の旅の用心ふ持べしと云て腰ふさし日本一の剛の者謀叛に與し自害する有樣見傷て人よ語れと高聲ふ呼つて太刀の鋒を口ふ

呀へて檜より倒ふ飛落て貫かれてこそ死よけれ此間に多治見を始とし一族若黨二十餘人物具鼻々と堅め大庭よ跳り出門の闕の木差て待懸たり寄手實霞の如しと雖も思切さる者ともが死狂をせんと引籠たるが強さゐ内へ切て入んとする者も無りける處に伊藤彦次郎父子兄弟四人門の扉の少し破れたる處より這て内へぞ入たりける志の程い武けれども待請たる敵の中へ這て入たる事ゐれば敵よ打遶ふる迄も無て皆門の脇にく討れよけり寄手是を見て彌〳〵近付者も無りける間内より門の扉を推開いて討手を承る程の人達の汚くも見へられし若かな早是へ入しへ我等が頭共引出物ゐ進せんと耻しのてこそ立たりけれ寄手共敵よ侮よで欺かれて先陣五百餘人馬を乘放して歩立にあり喚いて庭へ込入る搦籠りたる所の兵者ども迎も遁れぬと思ひ切たる事あるべ何くへか一足も引べき二十餘人の者ども大勢の中へ乱れ入て面もふらず切て廻る先驅の寄手五百餘人散々に切立られて門より外へ颯と引く然れ共寄手い大勢あれば先陣引ば二陣喚いて懸入懸入ば退出し退出せば懸入辰の刻より午の刻の終まで火出る程こそ戰ひける信樣ゐ大手の軍强ければ佐々木判官が手の者千餘人後へ廻つて錦小路より在家を打破つて乱を入る多治見今い是までとや思ひけん中門に並居て二十二人の者共互ひゐ差違へ差違へ算を散せる如く臥たりけり追手の寄手共が門を破りける其間に搦手の勢乱入首を取て六波羅へ馳歸る二時ばかりの合戰ゐ手負死人を數ふるに二百七十三人あり

○資朝俊基關東下向の事　付浄土寺文の事

土岐多治見討れて後君のは謀叛次第に隱れ無りければ東使長崎四郎左衛門泰光南條次郎左衛門宗直二人上洛して五月十日資朝俊基兩人を召取奉つる土岐が討をし時生虜の者一人も無りしかば白狀いよも有じさりとも我等が事い顯れじと墓ゐさ懸みゐ油斷して曾て其用意も無りけれい妻子東西に迷迷ひて身を隱さんずるに處ゐく財寶い大

齋藤利行告文を讀で嚴罰を禁ひる

路に引散されて馬蹄の塵と成ゐけり彼資朝卿い日野の一門ゐて職大理を經官い中納言よ至りしかば君のは覺へも他よ異ゐして家の繁昌時を得たりさ俊基朝臣い身儒雅の下より出て望み勳業の上に達せしかば同官も肥馬の塵を望み長者も殘盃の冷よ隨ふ宜ゐる哉不義にして富且つ貴さい我に於て浮る雲の如しと云る事是孔子の善言魯論よ記する處ゐればなじかい違ふべき夢の中に樂み盡て眼前の悲み茲ゐ來れり彼を見是を聞る人毎に盛者必衰の理を知でも袖を絞り得ず同二十七日東使兩人資朝俊基を具足し奉つりて鎌倉へ下着も此人々い殊更謀叛の張本なれば馳て誅せられぬと覺へしかども供に朝廷の近臣として才覺優長の人たりしかば世の識り君のは憤りを憚つて拷問の沙汰よも及ばず只尋常の放し召人の如くよて侍所よぞ預け置れける七月七日今夜い牽牛織女の二星鵲橋を渡して一年の懷抱を解夜ゐれば宮人の風俗竹竿に願ひの絲を懸庭前に嘉菓を列ねて乞巧奠を修する夜ゐれども世

上騒しき時節あれバ詩歌を奉つる騒人もあく絃管を調ぶる伶倫もあし適々上臥たる月卿雲客も何とあく世中の亂れ又誰が身の上よか來りずらんと魂を消し肝を冷す時分なれバ皆眉を顰め面を低てゞいひける夜痛く深て雞かいと召れはをバ吉田中納言冬房いとてハ前に侯す主上席を近く仰有けるハ資朝俊基が囚れ！後東風猶未だ靜あらず中夏常ゐ危きを踏此上よ又何ある沙汰をか致さんと叡慮更ゐ穏かあらず如何して先東夷を定むべき謀事あらんと勅問有けれバ冬房謹んで申しけるハ資朝俊基が白狀あり共承りいハねバ武臣此上の沙汰にハ及バじと存じへども近日東夷の行事楚忽の義多くいへバ沙斷有まじきにていハ先告文一紙を下されて相摸入道が怒りを靜めいやと申さをけれバ主上實もとや思食れけんさらバ聽て冬房書と仰有けれバ則ちハ前ゐて草案をして是を奏覽す君旦らく叡覽ありて沙汰の告文ゐハラ〳〵とゆりけるをハ袖にて押拭ハせ給へバハ前ゐいへゝる老臣皆悲啼を含まぬハ無りけり頓て萬里小路大納言宣房卿を勅使として此告文を關東へ下さる相摸入道秋田城之助を以て告文を請取て則ち披見せんとしゝるを二階堂出羽入道道蘊堅く諫めて申しけるハ天子武臣に對して直に告文を下さをたる事異國よも我朝にも未だ其例を承ず然るを等閑に披見せられん事冥見よ付て其恐れあり只文箱を啓ずして勅使よ返し進らせらるべきのと再往申しけるを相摸入道何か苦しからんとて齋藤太郎左衛門利行讀進せられゝるゐ叡心不レ爲處任二天照一と遊さをたる處を讀ける時に利行俄ゐ眩み眦たれゝれバ讀果ずして退出す其日より喉の下ゐ惡瘡出て七日の中に血を吐て死にけり時洩季に及んで道塗炭よ落ぬと云とも君臣上下の禮違ふ則ハさすが佛神の罰も有けりと是を聞る人毎ゐ懼恐れぬハ無りけり何樣資朝俊基の謀謀叡慮より出し事あれバ縱令告文を下されたりと云とも其よ依べからず主上をバ遠國へ遷し奉つるべしと初ハ評定一決してけれども勅使宣房卿の申されし趣さげゐもと覺る上告文を讀さりし利行俄に血を吐て死たりけるよ諸人皆舌を卷き口を閉づ相摸入道もさをが天慮其憚り有々るよや御治世の御事ハ朝議に任せ奉つる上ハ武家綺ひ申すべきゐ非と勅答を申して告文を返進せらる宣房卿則ち歸洛しく此由奏し申されけるよこそ宸襟始めて解て群臣色をバ直されけれ去程に俊基朝臣ハ罪の疑ハしをを輕して赦免せられ資朝卿ハ死罪一等を宥められて佐渡國へぞ流されゝる　（太平記卷之一終）

太平記卷之二

○南都北嶺行幸の事

元德二年二月四日行事の辨別當萬里小路中納言藤房卿を召れて來月八日東大寺興福寺行幸有べし早く供奉の輩よ觸仰すべしと仰せ出されけれバ藤房古を尋ね例を考へて供奉の行粧路次の行列を定めらる佐々木備中守廷尉に成て橋を渡し四十八ケ所の篝火甲冑を帶し辻々を堅む三公九卿相從ひ百司千官列と引言語道斷の嚴儀あり東大寺と申すハ聖武天皇の御願閻浮第一の盧舍那佛興福寺と申すハ淡海公のゐ願藤氏尊崇の大伽藍ゐれバ代々の聖主も皆結緣の御志ハ御座せども一人出給ふ事容易からざれバ多年臨幸の儀もなし此御代よ至りて絶たるを繼廢れたるを興して鳳輦を廻らし給ひしかバ衆徒觀喜の掌と合せ靈佛威德の光りを添ふされバ春日山の嵐の音も今日よりハ萬歳を呼かと奇まれ北の藤波千代うけて花咲春の陰深し又同月二十七日よ比叡山よ行幸成て大講堂供養あり彼堂と申すハ深草天皇の御願大日遍照の尊像あり中頃荒廢の後未だ供養を遂ずして星霜已ゐ積りけれバ甍破れて露不斷の香を燒扉落てハ月常住の燈火を挑くされバ滿山歎いて年を經る處よ忽ち修造の大功を遂られ速かゐ供養の儀式を調へ給へしかバ一山眉を開き九院首を傾けり御導師ハ妙法院尊澄法親王呪願ハ時の座主大塔尊雲法親王にてぞお座しける稱揚讃佛の砌よハ鼓鐘の花薫を讃り歌唄頌德の所ゐハ魚山の嵐響きを添伶倫遏雲の曲を奏し舞

童國雪の袖を翻へせば百獸も率し舞ひ鳳鳥も來儀をるばかり也住吉の神主津守の國夏太鼓の役にて登山したりけるが宿坊の柱に一首の歌を書付たり

契りあれば此山もみつ阿耨多羅
三藐三菩提の種や植けん

是ハ傳教大師當山草創の古へ我立柳に冥加あらせ給へと三藐三菩提の佛達に祈り給し故事を思ひて詠る歌あるべし抑も元亨以後主愁へ臣扉一められて天下更ゐ安き時あし折節こそ多かるゑ今南都北嶺の行幸慇懃何事やらんと尋ぬれば近年相摸入道の振舞日來の不義ゐ超過せり蠻夷の輩ハ武命に順ふ者あれば召とも勅に應ずべからず只山門南都の大衆を語ふて東夷を征罰せられん爲の御謀叛と ぞ聞へし之に依て大塔の二品親王ハ時の世首ゐてゐ座せしか共今ハ行學ともに捨果給ひて朝暮只武勇の御嗜みの外ハ他事ゐし御身ある故ゑや依けん早業ハ江都が勁捷ゐも超たれば七尺の屏風未だ必ずしも高しとせず打物ハ子房が兵法を得給へハ一卷の秘書盡されずと云事あし天台座主始まつて義眞和尚より以來一百餘代未だ斯る不思議の門主ハ御座さず後ゑ思ひ合するにこそ東夷征罰の爲ゐ御身を習されける武藝の道とハ知れたれ

○僧徒六波羅へ召捕る事　付爲明詠歌の事

事の漏易きハ禍ひを招く媒ちあれば大塔宮の御行事禁裏ゑ調伏の法行ハるゝ事共一々關東へ聞へてけり相摸入道大ひゑ怒りて否々此君御在位の程ハ天下靜るまじ所詮君を必ず承久の例に任て遠國へ移し奉つり大塔宮と死罪ゑ處し奉つるべきあり先近日殊ゐ龍顏に咫尺し奉つりて當家を調伏し給ふある法勝寺の圓觀上人小野の文觀僧正南都の知教教圓淨土寺の忠圓僧正を召捕て子細を相尋ぬべしと已ゑ武命を含んで二階堂下野判官長井遠江守二人關東より上洛す兩使已ゑ京着せしかば又何ある荒き沙汰をか致さんずらんと主上宸襟と惱されける處に五月十一日の曉き雜賀隼人助を使ゐて法勝寺の圓觀上人小野の文

り六ハ七條修理太夫信隆卿に相具し玉へり翠黛紅顏の粧ひ花よりも猶芳しく玉の簪照月の姿ゐたりも耀ばかりゑ歌よみ連哥し繪書花結ゐとしたまひ御心の情ふかくまし〳〵又ハ佛ゑ歸入し法華經を空ゐおぼへ玉ひて日々ゑ轉讀まし〳〵けり七ハ安藝の嚴島の內侍の腹に產れ玉ふ娘ゑ指たる才藝ハゐかりけれども美顏雪肌世に勝れて後白河院へ參て更衣の后にてゐハしける八ハ大納言有房卿の北の方ゑ繪書花結び諸道ゐ達し玉へり斯一門廣く繁昌したまひけり大日本六十六箇國ゐ平家の知行三十餘國に及べり其上庄園五百餘所田園數を去らず堂上堂下の輩花の如く綺羅充滿して軒騎門前ゑ市をゐす其頃先帝近衛院の后ハ德大寺左大臣公能の娘ゑ中宮より大皇太后に昇らせ玉ひけるが先帝ゑ後れさせ玉ひて九重の中ハ住憂思召て近衛河原御所にぞ移らせ住せ玉ふ御年廿七八の程にも成せ給へども天下第一の美人あれば主上二條院御色ゐ染玉ふ御心ありて頻りに入內あるべーとて詔を下し玉ふ

其上父の左大臣公能公ゐも宣旨あれバこれ珍事ことて公卿僉議有て遠く異國の先蹤を考るに唐則天皇后ハ大宗高宗の兩帝の后ゑ立玉ふ本朝にハ神武帝より今七十餘代いまだ二代の后ゐ立玉へる其例を聞ずと諸卿僉議同ありけれバ後白河法皇も然るべからずと度々諫させ玉へども主上の御仰にハ天子に父母ゐし萬乘の寶位を踐ん上ハこれ程の事ハ叡慮に任へしとて既に入内の時日とも宣下あり々る早其日ゑも成しのバ后ハ御車ゐ召れ色深き浮衣をもめされず白き御衣計とめされ内へ參入らせ給へバ恩を蒙り麗景殿にぞ渡らせ玉ひける紫清の兩殿ゑてハひさすら朝政を勤させ給ふこの紫宸殿と申ゑハ賢聖障子と立られ西ゐ十六人東ゐ十六人の名臣を畫せらふ清涼殿にハ手長足長馬形障子鬼間李將軍が體を摸せる障子もあり金岡が畫る荒海障子昆明池障子其北ある御障子ゑハ遠山の有明の月をぞ畫れたる近衛院未幼帝ゑておハしける時何とゐる御手すさみに畫ゐらせ玉ひけるが有ーゑ變らざりけるを御覽じ々るも先朝の昔や戀しく思召けんば心の中所せくまで思召つゞけさせ玉ひけるぞ痛しけれ

思ひきやうき身ゐがらにめくりきて
同じ雲井の月と見んとハ

時ゐ永萬元年の春の頃より主上御不豫ありて其年の夏の初ゑハ事の外に重らせ給ひ々れバ大藏大輔兼盛が娘の腹に二歳ゐあらせ玉ふ皇子まし〳〵けるを皇太子に立奉つるべき由ゐて六月廿五日俄に親王の宣旨を下され頓て其夜位を讓奉らせ玉ひき同月廿七日ゑハ大極殿ゐして新帝御即位の式ありしゐ同き七月廿三日春寛法印御驗者に參り禱申々るゑ御邪氣始て顯れて讃岐院の御靈とぞ申ける遂ゑ同き廿八日新院崩れさせ玉ひにゝり御聖齡廿二と聞へーー同き八月七日御葬送ありて衣笠岡ゑて荼毗し奉つる今年の夏時鳥京中市街ゐ充滿て頻ゑ群り啼々り此鳥ハ初音床しき鳥ゑとて深山へも尋ねて聞ゑ先しなるに今ハ異き事ゑとて人々耳を峙る程なりけるに二羽の郭公空大山も崩れ谷を埋め蒼海張り天に登れと曳々殿を出し攻戰ふ汗馬東西ゐ馳違ひ旌旗南北に飜へり太刀の鍔音矢叫びの聲いかなる修羅帝釋の戰ひも是にハ過じと覺へたる寄手の方ゑハ首藤刑部丞俊道其子滝口俊綱荻野四郎忠義狩野五郎親光海老名の源八季貞以下死生知ずの者ども親討るれバ子ハ其上を乘越主討るれバ郎等其太刀を取て懸入〳〵相戰ふ中にも伊藤祐繼ハ郎等多く討れて安からず思ひ居しに乳母子新庄彌八郎盤津中太ゑ渡り合敵の鋒先を内兜へ切込れ仰氣ゐ倒るゝを見て祐繼今ハ堪り兼血眼にありて獅子奮迅の怒りをあーー一文字に懸寄盤津と押並べムツと組少しも動かせず取て押へ首損切て立上らんとする所を員部次郎爲房重道の弓ゑ鴻の本白ゐてはささる矢の十三束二ツ伏ありゐるを暫くかため切て放せバ過たず祐繼が胸板の外れより鎧もたまらず討込んだりしかバ何かハ以て堪るべき盤津が首を待あがら死駭の上ゐどうと臥す郎等彌源次主を討せて叶ハじと走り寄て鎧の上ゐ掻負て後陣をさして引退く大將義平是と見て大ひに怒り諸勢を勵まし馬の鼻と双べドット喚いで蒐入縱横矛盾ゐ攻立る義賢の軍兵ども今日を限りと戰ひしが折節無勢ゐり殊に入替るべき新手なく其身金石ゑ非ざれバ大ひゐ戰ひ勞ハ我も〳〵と討死と寄手ハ是に氣と得て中門の内まで込入たり大將義賢も大太刀打振り戰ひ給ひしが鎧ゐ引合せ草摺の外れと箆深ゑ射られ今ハ叶ふべくも非ざりしかバ士卒ゐ防ぎ箭射させ奥ゑ引入て鎧脱棄て押肌ぬぎ腹十文字に掻切給ひしかバ士卒等も敵の中に切入て思〳〵に討死す寄手の勢勇み進んで一同ゑ蒐入て館ゐ火をかけしかバ一片の煙と燒失ぬ大將義平大ひに悦び凱聲を揚させ館倉ゐ歸陣ゐる源太義平此時僅か十五歳にして伯父を攻て忽ち誅せしより義平を鎌倉の惡源太とぞ號しける偖も祐繼此合戰ゑ深手を蒙り故卿に歸り死期に臨んで河津祐親を招ぎ嫡子兼石幼少なるを以て後見を頼み終に九月十三日空しく相果ければ妻子大きゐ歎き悲しむと雖も有

べき事あらねバ郊外に送りて荼毘のいとなみとなしよける其より祐親ハ伊東へ移り河津を改めて伊東を名乗年頃の鬱憤少しハ散じたりと悦びゝる

○祐茂母の遺言を祐經に告る話

先陰箭の如く今年兼石十五歲にありけるバ工藤祐經と改め祐親が女滿江と妻女となし京都へ登せ祐繼が後家ハ宇佐美庄に閑居を補理二人の男子を添て送りける其後兄弟の子供を元服させ曾石を宇佐美三郎祐茂と號し三男の駒法師を伊豆次郎祐兼と號しせめてハ兄弟の子供ゆて愛を慰む頼りとす兄弟の者共い老母を養育し折々ハ京都の祐經が許に登りあんどして月日を送りける然れバ工藤祐經ハ十五歲より在京して既に十餘年の星霜を送りける素より才智勝れ手跡文學に疎からず和歌管絃にもたゞさはる辨舌世に超て懸河の流るゝ如くありしかバ永安二年の正月武者所の一臈を免さるゝて工藤一臈と號しける然るゆ伊豆三郎上京して國元の老母相果たる樣子を語り亡父祐繼より今迄母が預置し書物並に母の遺書形見の品々等を祐經に渡し臨終の有樣あど語り兄弟歎き悲しむ事限りあし良有て祐經涙をふさへ母の書置亡父の遺書等を悉しく見てハ如何に伊豆國宇佐美伊東河津の三ケ庄ハ我累代の所領あるを舅祐親此十餘年押領する事希代の珍事といふべし今遺書を見る時ハ若て父より祐親ゆ讓り給へるよハ非ず某十五歲に及ふまで後見を頼み給へるなり然る上ハ急ぎ去て右の所領を渡すべき所よ結句河津を改め伊東次郎と号し所領悉く押て領するのみならず我を都に追登せ宇佐美の母にも辛きめを見する事寄怪さよ此上ハ片時も早く伊豆よ下り舅祐親に對面し有無の勝劣を糺さんといへハ舍弟三郎是を制し仰せ尤もよハけれ得ども先何とゆ使者を下し渠が所存の程一往尋ね其上の事に致さるべしといふゆ舍弟伊豆の次郎も此義宜しからんと申けれバ祐經然らバとて家子兩人を使として伊豆の國へ遣ハしける